母に奪われた性感

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
　母に奪われた性感

【Ｎコード】
　Ｎ３５０８Ｚ

【作者名】
　ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
　中学２年の千紘が、勉強のことしか頭にない母に性感を奪われてしまった物語です。女性の方も男性の方も股間を抑えながら読んでください。感想お待ちしています。

①

自分のほかには誰もいない静かな夜だった。千紘は自室のベッドの上で、ズボンとショーツをゆっくりとおろした。下腹部には毛痕があり、２週間ほど前まで陰毛が生えていたことがうかがえた。千紘は傍らの机から手鏡を取り出すと二本の足の間に差し込んだ。少し色素のついた大陰唇が見えた。大陰唇を指で開くと、やや小ぶりな小陰唇があらわれた。その上部にあるクリトリス包皮をそっとめくってみた。本来ならそこには小さな突起、クリトリスがあるはずである。千紘のその部分にも２週間前までは確かにあった。今、千紘のその部分にクリトリスは見当たらない。皮をしっかりめくると、奥のほうにようやく根っ子の部分を見出すことができた。股間に差し込んだ手鏡には、クリトリスの根元付近に見える赤い傷跡が明瞭にうつっていた。

②

もう少しで中学３年生、高校受験生となる千紘は、春休みのため一日の大半を家の中ですごしていた。千紘がまだ小学校にあがる前から、母はスパルタ教育を施していた。勉強の妨げになるものはすべて排除する姿勢を貫き、マンガやゲームの類は有害だとして一切持ち込ませなかった。千紘が興味を示していたレゴブロックやビーズセットなども、勉強がおろそかになるといって没収・処分した。母が監視するため塾にはいかせず、教科毎に家庭教師をつけている。母が監視する居間で、母の決めたスケジュールに基づいて勉強が行われていた。学校が終われば友達と遊ぶことも許されず、すぐに帰宅して勉強せねばならない。朝から晩まで、学校にいる時以外は常に母の監視下にあった。母はどんな成績でも満足するということがない。テストで間違えがあれば、その分だけ千紘の頬や尻をたたい

て罰を与える。その日は実家に用事があるということで母は外出していた。父もまだ帰ってきておらず、滅多にないひとりの時間である。そのわずかなチャンスを利用して千尋は自らの股間を確認していた。

③

千紘のクリトリスは根元部分を残し、大部分が切り取られていた。2週間ほど前、母が自らの手で娘のクリトリスを切り落としたのだ。千紘が自慰行為をしているのを見つけた母が、勉強の妨げになるということで、受験生になる前の休暇を利用して摘み取ったのだ。母にとって、勉強の妨げになるという意味で娘のクリトリスはマンガやゲームと同一のものであった。自慰の習慣がない母にとってクリトリスはただ自らの体についているだけの器官であり、メリットもデメリットもないと考えていた。しかし快感を得て勉強の時間を奪うのであれば邪魔なものに過ぎなかった。千紘がクリトリスの存在を知ったのは中学に入ってすぐにあった保健体育の授業がきっかけだった。風呂場で自分の体を観察していた千尋は、股間の奥に小さな突起があることを見つけた。そこに触ることは快感だった。それから千紘は風呂に入るたび、トイレに入るたびにクリトリスを触った。自室で勉強をしている際も問題に行き詰るとショーツの中に手をいれてクリトリスを触った。娘のプライバシーは不要と考える母に、その瞬間を見つけられるのは時間の問題だった。最初に見つけた時、母は千紘の頬に平手打ちを与え、二度と触ってはいけないと厳しく諭した。しばらくは行為を控えていた千尋だったが、時々はその快感を忘れることができず、ショーツに手をいれていた。

④

⑤

中学2年生最後の試験中、再びその行為が母に発見された。母はにらみつけただけで何も言葉を発せずにその場を立ち去った。千紘は嫌な予感がした。禁止された行為を、しかも定期試験中にしていて何も起きないわけはない、何か良くないことがわが身におきると直感していた。その予感はテストを終え、修了式の日に的中することとなる。学年でもトップクラスの成績表を鞄に入れた千尋が帰宅すると、居間には以前祖父の介護で使用していたベッドがおかれていた。珍しく父も早めに帰宅していた。母は成績表を取り出そうとする千紘を制し、鞄をおいて制服を脱ぐように命じた。父の前で恥ずかしかったが、その場でセーラー服とスカート、靴下を脱いでブラとショーツだけの格好になった。私服を取りに行こうとする千尋を再び制した母は、そのまま仰向けでベッドの上に寝るよう指示した。何が起こるかわからず戸惑う千尋を母は促した。そして仰向けに寝ると、母は千紘のショーツに手をかけ、あっという間に足から抜き取ってしまった。父のいる前で、少し大人びてきた股間を露わにされ、千紘は叫んでしまった。あわてて股間を隠そうとする千紘の手を母は払いのけた。「動いたら怪我するわよ」とだけ言った母は、あわ立てた石鹸を千紘の下腹部に塗ると、安全剃刀をかけた。約1年前に生え出した薄い陰毛は、あっという間にそり落とされてしまった。大陰唇の付近に生えている僅かな陰毛をハサミで切り落とし、股間に邪魔なものがなくなったことを確認した母は、アルコールの香りがする消毒液をしみこませたガーゼを使い、千紘の股間を消毒した。大陰唇や小陰唇の内側、肛門までを強い力で消毒し、最後にクリトリスの包皮を剥いて敏感なクリトリスを消毒をされた時、千紘は今日のお仕置きがクリトリスであること、先日見つかった自慰行為のお仕置きであることがハッキリした。

母は千紘の体を一度起こし、ベッドの縁に腰掛けさせた。父が千紘の後ろからベッドにのぼり、あぐらをかいて千紘を寄りかからせた。千紘の両腕を後ろに組ませ、全体重を後ろに倒すよう命じた。母は千紘の足を大きく開き、ふくらはぎのあたりにベルトを巻くと、ベッドの足とくくりつけてしまった。両足を開いて股間を露わにした状態で固定された千紘の太ももに、父が自分の両足を乗せて更に固定した。手と足を完全におさえられて、千紘は身動きがとれなくなってしまった。次の瞬間、母は紙袋の中から先の細いピンセットと、形は小さいが大変よく切れるハサミを取り出した。

⑥

千紘は直感した、母は自分のクリトリスを切ろうとしているのだ。物は捨てても身体までは傷つけないと思っていたが、この母にとって勉強の妨げになるものは全て排除の対象なのだと認識した。恐怖で声すら出すことができない千紘に対し、母はクリトリスを皮の上からつまみながら、「これはあってもなくても問題ない部分だし、勉強の妨げになるようだから取り除きます」とだけ静かにいった。われに返った千紘は泣き出したが、どうにもならなかった。どんな痛みがおそってくるのかすら想像できない。母はすべり防止のため手袋をつけ、千紘の股間に手を伸ばした。大陰唇・小陰唇をめくり、クリトリス包皮を根元まで剥いた。普段は皮の中に閉じこもっているクリトリスが外気にふれるとくすぐったさで内腿が震えた。次の瞬間、母は右手にもった細いピンセットで千紘のクリトリスの柔らかい先端部分をつまんだ。一度も経験したことのない痛みに顔をしかめた千紘にかまわず、母は力いっぱいクリトリスを引っ張った。神経が集中している部分を、金属製のピンセットで力強く引かれるのだから痛いのは当然だ。

⑦

母はピンセットを左手に持ち替えた。そして右手にハサミを握ると、クリトリスの根元部分にあてがい、一瞬で先端を切り落とした。肉塊のようなクリトリスであるが、小さくて柔らかい突起であるから、鋭利な刃物であれば一瞬にして切れてしまう。当然の如く、大量の鮮血が噴出し、母の顔にもかかった。感じたことのない激痛に暴れだす千紘であるが、体格のよい父の力を振りほどくことはできず泣き叫ぶことしかできなかった。母はすぐさま出血止めの薬を塗りこんだガーゼを残ったクリトリスにおしつけた。強く押し付けることを繰り返すと、程なく大量の出血は抑えることが出来た。母はもともと、看護学校を卒業して看護師として勤務経験もある。だから術後の手当てなどは手馴れたものだった。しばらく出血は続くので、クリトリスを中心にガーゼをしっかりあてがいテープで固定した。それが終わるとピンセットに残されていた千紘のクリトリス先端部分をガーゼにつつみ、そのままゴミ箱へと捨てた。人体の一部という感覚はまるでなく、ゴミを捨てるとのまったく同じようなしぐさだった。母にとって娘の性欲など、今は全く必要のないものなのだ。

⑧

体中で最も敏感な部分を切り落とされた千紘は痛みと恐怖で泣き続けていた。父の手が離れて、ベルトもはずされると体は自由になったが、動くこともできなかった。ベッドの上でブラ一枚の状態で、仰向けに倒れこんだ。母は裸の下半身に薄い毛布をかけ、しばらく休むようにと命じた。それからしばらくの間、千紘はガーゼの取替えと排尿の度に激痛を味わうことになる。尿は傷口にしみた。でき

るだけ水分を摂取しないようにつとめていたが、それでも一日一回は出すものを出さねばならない。トイレの中で一人激痛とたたかった。母は一日に2~3回、傷の手当をした。血が固まったガーゼをはがすとき、そして患部を消毒するときは非常に痛かった。

⑨

さすがの母も家庭教師は一週間休みにしていた。その間はベッドに横たわった状態で参考書を読むだけの学習だった。傷口がいえはじめた頃、再び家庭教師による学習がはじまった。一週間たつと、同じ姿勢を保つだけなら痛みは感じないようになっていた。千紘はガーゼ交換の際、できるだけ股間を見ないようにしていた。先端部分を失ったクリトリスを見ればあの日の痛みと恐怖がまたよみがえる。一日も早くあの悪夢を忘れてしまいたかった。

⑩

切り取られて約2週間がたった。母が出かけたこの日、千紘は自分の性器を確認してみようと思った。母がいる日にそのような場面を見つかれば誤解を受けて、残っている根元をも切られかねない。だからじっくり観察するなら今日しかなかった。風呂場やトイレの扉もノックをせずにあける母である。それにじっくりと観察するにはベッドの上で手鏡を使うしかなかった。大部分を切り落とされたクリトリス周辺の生々しい傷跡を見て、千紘はため息をついた。指でそっとなでてみたが、その感触は快感というものとは大いにかけ離れていた。もうあの快感を味わうことはないと実感した。それはまだ14歳の少女にとってあまりに厳しいことだった。今後の人生で喜びを与えてくれるであろう性感を母の手で摘み取られた千紘は、

大粒の涙を流した。